

【3】江上地区ってこんなまちです

(江上地区の紹介)

江上地区は針尾島の東部に位置します。江上町や有福町からは、縄文時代の^{やじり}鍬等が出土しており、江上には遠い原始時代から人が住んでいたことを物語っています。また、大和古墳時代のものと思われる松ヶ崎古墳からは直刀が発見され、当時有力な豪族がいたと考えられます。

戦国時代に歴史の表舞台に登場した指方城主指方善芳^{ぜんぼう}は、松浦方に属し、誠実な武将として軍功を挙げました。今も指方町にある善芳の墓と、その子庄左衛門の墓（おやしろ様）は地域の人々によって丁重に祀られています。

戦国争乱の中、江上でも唯一の戦いが起こりました。元龜3年（1572年）、指方城代針尾三郎左衛門^{げんき}は、大村領主大村純忠の誘いに乗って松浦領主松浦隆信^{そつむ}に叛いて怒りを買ひ、松浦軍によって指方城を攻撃され戦死しました。これにより、長年にわたる針尾一族による針尾島統治が終わりを告げました。

江戸時代に入ると新田開発が盛んに行われました。約300年前は海だった今の指方新田は、小値賀の小田伝次兵衛によって開かれ、その名前を取って小田新田と呼ばれています。また赤子新田（現ハウステンボス）は、戦争中は針尾海兵団、戦後は引揚援護局、陸上自衛隊駐屯地として使われ、その後は工業団地用地となり荒れ果てていましたが、平成4年に日本最大のテーマパーク「ハウステンボス」が建設されました。

ハウステンボスに近い江上の南端には「大島」があります。周囲4キロの小さな島ですが、島の丘にある公園からは、ハウステンボスを眼下に大村湾の絶景が一望できます。昭和63年に島民の長年の夢であった橋が架かり、さらに「特別養護老人ホーム サンホーム江上」や「サンレモ リハビリ病院」ができたことで島民の生活も一変しました。

昭和30年に東彼杵郡江上村から、佐世保市に編入して以来人口も増え、続々と団地ができるなど、この静かな歴史の町田園も、近年急速に都市化しつつあります。

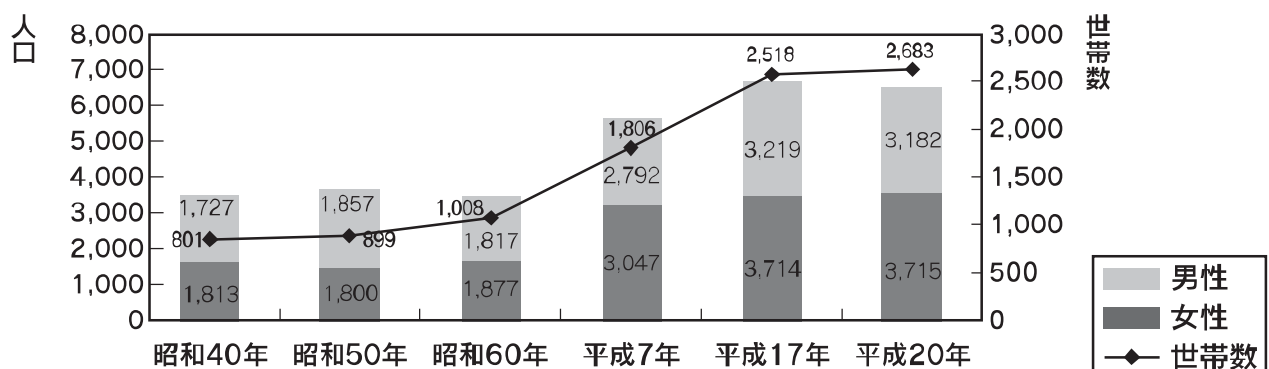
★江上地区って……どのあたりをいうの？

現在、江上地区と呼ばれる範囲は、次のとおりです。

町名	江上町、指方町、有福町、ハウステンボス町
----	----------------------

(江上地区の人口推移)

※いずれも10月1日時点の統計資料



〔佐世保市における江上地区の位置〕



(江上地区“わがまち自慢”)

江上地区には“自慢”がいっぱい！その一部を紹介します。

江上大島(たぐり船・赤レンガ)

昭和63年に江上大島橋が開通し、それまで島民の交通手段として重要な役割を果たしていた「たぐり船」が姿を消すことになりました。

たぐり船は、当初は木製の船で、進路を固定する案内ロープと、船を動かすためにたぐるロープが備えられていました。島民の足として利用されていましたが、ロープが古くなるとちぎれてしまい、足止めされることもありました。

また、江上大島には、明治時代に数百人が働く煉瓦工場があり、そこで作られた製品は、佐世保の軍港建設に使われました。島の南側の波止場付近には、今でも煉瓦の破片が残っており、昔が偲ばれます。



江上文旦・西海みかん「出島の華・味っ子・味まる」

温暖な気候と豊かな自然に恵まれた江上は、柑橘類の宝庫であり、中でも江上文旦と西海みかん「出島の華・味っ子・味まる」は地元の特産品です。

江上文旦の歴史は古く、江戸時代末期までさかのぼります。1玉1kgほどの大きさになり、かぐわしい香りと淡白で上品な味わいは、贈答用としても高い需要があります。

また、西海みかん「出島の華・味っ子・味まる」は、ハウステンボス町を望む丘陵地で、魚粉を中心とした100%有機肥料とカキ殻を施し、耕地全体をシートで覆って栽培されています。糖度が高く、関東・東北などでは、数年来日本一の高値で市場取引されるなど、高い評価を受けています。



八幡神社の秋の礼大祭

八幡神社は、弘仁14年(823年)に、現在の江上小学校のある丘に、「通稱八幡平」と称して創建されました。指方新田の干拓によって現在の地に移り、明治4年(1871年)に江上村の村社となりました。

礼大祭は、「岩下・伊勢川」「鳥越・神場」「上小島・下小島・小田」の3組が交替で祭典を担当することとなっており、御神幸を先導する猿田彦(鼻高様)は当番町の公民館長が務めることになっています。

礼大祭は御神幸の祭典から始まります。その後、指方交差点から殿様通り、金山を経由し岩下海岸で御潮取の神事が行われ、権現岩の下、本船神社、小学校前を通って神社に戻られ、納めの式典が行なわれます。



有福の茶屋ばやし

この踊りは、男子が女形になり、笛、鐘及び太鼓の演奏に合わせて「茶々まめサイサイ」と掛け声を出しながら、福をもたらすといわれる豆の入った袋を蒔いて踊るものです。明暦2年(1656年)の干ばつで、熊本県の山本玄蕃という人が行った、雨乞いの奉納が起源と伝えられており、「げんば流浮立」ともいわれています。

戦時中は一時途絶えていましたが、青年団により復興され、それを子ども会が引き継ぎ、県及び市が主催する子ども会伝承芸能大会にも数回参加しました。

現在は、再び成人男性により継承されていて、例年、子安観音の千日堂祭及び天満宮の祭典で奉納されています。

